〔古武道研究班〕

江上 茂の空手道思想に関する研究

中谷康司　青木清隆
宮本知次

The Thought of Karate-Do by Shigeru Egami

Abstract

The present study was investigated about the thought of Karate-Do by *Shigeru Egami*. *Egami* performed Karate in Waseda University and became *Gichin Funakoshi*'s pupil. He spread Nihon Karate-Do without employing the system of game on Karate. *Houken Inoue* handed 'Heiho' to Egami. 'Heiho' was Japanese traditional thought in martial art. 'Heiho' is quite similar to 'Win Without Fighting' in the Art of War by *Sun Tzu*. This thought common to *Funakoshi*'s thought of Karate-Do. Therefore, *Egami* thought that Karate-Do was not combat skill and competitive sports. We propose that we should have realized about the thought of Nihon Karate-Do by *Shigeru Egami*, when we consider the future development of Karate.

1. はじめに

1-1. 研究の背景と意義

我々はこれまで，空手道の近代化について明らかにするために，その重要人物として本土に空手を普及した船越義珍（ふなこしぎちん）（1868（明治元）年–1957（昭和32）年）に焦点をあて，近代化の経緯を追うとともに[1]，本土と沖縄での経過の違い[2]，あるいは柔道の近代化と比較することによって[3]，その特徴を浮き彫りにしてきた．その過程で，空手道の近代化には，試合採用の成否，またそれに関連した組織化の問題があることを指摘した．一方，我々は空手道の近代化の全般に亘って影響を及ぼしてきた船越義珍の空手道思想を検討し，船越は「真の空手」すなわち「空

手道」を「護身」という面から理論化し，有事に臨んで実際に身を護る「護身」としてはもちろんであるが，それに留まらず，自分自身を悪い状況に置かない（身を助ける），ひいては自分自身の状況を好転させる（身を活かす）という処世の在り方にまでつなげる崇高な思想へと昇華させていたことも明らかにした[4]．このような思想から先に挙げた空手の近代化における試合の位置づけを考えてみると，単に技が危険であるから空手は試合ができないということだけではなく，現在，広くおこなわれている競技化された空手が，自ら争い，攻撃力を競い，勝敗の結果のみに主眼が置かれる在り方，それ自体が船越の考えた「真の空手」「空手道」の理念に合致しないことも意味する．

船越義珍の数多く存在する弟子の中から，試合に対する態度に着目すると２人の代表的な弟子を挙げることができる．一人は試合をする道を辿り，日本空手協会を創設した中山正敏（なかやままさとし）（1913（大正2）年–1987（昭和62）年）であり，もう一人は試合をしない道を辿り，松濤館を再建，２代目館長となった江上茂（えがみしげる）（1912（大正元）年–1981（昭和56）年）である．我々は先ず近代化における試合の在り方を検討するために，その推進者となった中山の空手道思想に注目した．その結果，試合化の推進によって普及は進んだものの（競技スポーツとしての高揚），ポイントを奪取するために本質を失った動作の攻防が目立つようになり（武術としての衰退），上記に示したような船越の掲げた「空手の心」は顧みられない状況が常態化し（武道としての後退），最終的には試合化を推進した中山自身の空手道思想にすら合致しなくなっていったことを指摘した[5]．

一方，江上は船越義珍門下の中で試合をしない道を辿りながらも，空手を広く普及し，海外（アメリカ，フランス，スペイン，イタリア，ポルトガル，スイス，イギリス，台湾，など）にもその信奉者を多く持つに至った人物である．江上が空手道をどのように捉え，伝えようとしたのかを明らかにすることは，競技化の進む現代において，空手道が文化としてその独自性あるいは本質を維持していく在り方を探る上で，非常に重要であると考えられる．しかしながら，これまでに江上茂を研究対象として扱った研究は存在しない．そこで，本研究では，船越の弟子の中で，もう一人の代表者として江上茂に焦点をあて，江上がどのような空手道思想を堅持していたのかを明らかにすることを目的とした．

1-2. 研究の方法と限界

先の研究でも指摘したように，空手史研究が歴史研究の対象とされにくい背景には，歴史研究に必要とされる一次史料が不足していることが挙げられる．元々，空手の伝承形態は個人指導かつ秘密主義を基本とし，口伝を中心におこなわれてきたことから，歴史的に伝書のような

史料はほとんど存在しない．また，本研究で対象とする江上茂の生涯は1912（大正元）年～1981（昭和56）年に亘るものであり，その中盤に太平洋戦争（1941（昭和16）年～1945（昭和20）年）を挟むことから，戦災・戦後の混乱によって貴重な史料が焼失，散逸し，体系的な史料の入手が難しい．従って，従来の歴史研究でおこなわれるような一次史料のみに重きを置いて研究を進めていく手法を使うことができない．

また，学問領域や文筆活動を伴う表現行為などでは，人物の初期からその主張が残される特徴を持つが，それらを伴わない表現行為や武道などの芸事，技術的な習熟・成果を要求される分野においては，修行時期に思想・信条を明確に示すことは少なく，一定の成果や指導者としての地位が確立してから，初めて自らの主張を残すケースが多いと考えられる．したがって，その思想の変化を探るためには，当時の断片的な史料と後年の記述から遡ってその変化を推測する以外に方法がない．

そこで，本研究では二次史料や口碑記述の利用，事実関係の積み上げなど，様々な素材を使って思想や文化を明らかにしていく文化人類学的な手法も取り入れて検証作業を進めていくこととする．

江上の生涯については，門人たちによって作られた『江上茂追想録』[6]，並びに妻，江上千代子の視点からその生涯をまとめた『君影草』[7]，また近年，生誕100周年を記念して開催された「江上茂を語る会」に際して編纂された『江上茂生誕100周年記念誌』[8]が詳しい．これらは私事も含み膨大なものとなるため，本研究では空手道とより関係の強い出来事のみを，これらの資料から概観し（2–1），その他の史料から補足，修正を加えつつ，江上の中で空手道思想により大きな影響を与えたと考えられる点について指摘する．

また，思想については以下の点を中心に検討を進める．我々は船越義珍の空手道思想をまとめる際，各時代に沿って「空手の普及の形態」「空手の範囲」「空手の技術」「試合に関する思想」「空手の精神性」などのテーマを必要に応じて選択し，検討を進めた．本研究で対象とする江上については，船越が沖縄から本土へ拠点を移動するといったような出来事は存在しないため，時代の区分は設けず，また，既に船越の時代に定まっている「空手の普及の形態」「空手の範囲」については除き，「空手の精神性」「空手の技術」「試合に関する思想」の３つのテーマに絞ってどのような考えを持っていたのかについて検討する．

2. 江上茂の略歴と思想の背景

2-1. 江上茂の略歴（巻末年表参照）

江上 茂（えがみ しげる）は1912（大正元）年12月７日，福岡県大牟田市に江上 平，ハツの第３子，次男として生まれた．

1931（昭和6）年，早稲田大学第二高等学院へ入学すると，野口 宏，今井 盍，岩田満男，横山二雄，赤崎利馨，萩原正義，長谷川萬年，安居院栄治，植村 茂，中村賛蔵，有滝 一，森下彌三雄，松田林平，太田美三郎らとともに，船越義珍を師範とする早稲田大学第一高等学院空手部を発足し[9]，空手の稽古を始めた．翌1932（昭和7）年には，体育会に入会した第二高等学院空手部において，松田林平とともに代表委員を務めている．1933（昭和8）年，早稲田大学商学部に入学すると，船越義珍を師範と仰ぐ空手研究会を体育会に入会させて空手部を発足し，委員を務めた（代表委員：萩原正義，赤崎利馨）．そして，1935（昭和10）年には野口 宏とともに代表委員となり，1936（昭和11）年に卒業を迎えるまで稽古に没頭した．この間，船越義珍の師範代であった下田 武（1901（明治34）年-1934（昭和9）年）の指導を受け，その没後は同じく師範代となった義珍の三男である船越義豪（よしたか）（1906（明治39）年-1945（昭和20）年）の下で稽古に励み，２回の九州遠征，各所での演武会など普及事業も含めて，積極的な活動をおこなっている．代表委員時代には東京学生空手道連盟設立準備会が開かれ，松濤館道場建設計画（早大，慶大，一高，商大，日医大）が話し合われるなど，大学を越えた組織についても強化される機運の中にあった．折しも，師匠の船越義珍が『空手道教範』（廣文堂書店，1935（昭和10）年）を出版した時期にあたる．

卒業後は就職をせず，郷里大牟田と東京を行き来しながら，満州あるいはブラジル行きなどを模索した時期があったようであるが，いずれも実現には至っていない．また，陸軍へ入隊しても肺結核で除隊することになるなど，生活としては定まらない中で稽古を続けていたようである．その後，1939（昭和14）年より，陸軍省兵務局軍事調査部に入り，陸軍中野学校で術科「空手」の教官に就任し，退官する1943（昭和18）年までは安定した生活となった[注1) 10,11,12)]．この間，私的には1941（昭和16）年に山口幸次郎，マツの長女，千代子（1917（大正6）年-1991（平成3）年）と結婚し，翌年には第１子を授かった（1942（昭和17）年に長男の尚志（たかし），以降1945（昭和20）年に次男の仁士（ひとし），1947（昭和22）年に三男の正威（まさたけ）の３子を儲けた）．陸軍中野学校では，同時期に国体学の教官を務めた吉原政巳と親交が厚く，家族を含めた交流があり，長男の名前の考案者でもある．

陸軍省退官後は，郷里大牟田市を中心に戦中戦後を過ごし，1950（昭和25）年には拠点を関東に移すが，居住地，生業ともに転々とする不安定な生活が続く．しかし，この間も機会があれば各所にて空手指導の場を設けており，稽古とは一貫してかかわり続けている．終戦直後，後に江上に大きな変化を与える契機を創出した早稲田大学空手部の後輩，奥山忠男（1918（大正7）年–2006（平成18）年）との共同生活の記録がある．

1953（昭和28）年，東京に居を移すころから，空手の表舞台に登場するようになる．この年の５月，早稲田大学の同級生で中央大学空手部の師範を務める廣西元信（1912（大正元）年–1999年（平成11）年，松濤會二代理事長・三代会長）を訪ねて中央大学を訪問した際，高木 丈太郎（1927（昭和2）年–2016（平成28）年，松濤會三代理事長・館長）に指導を乞われ，それを契機に中央大学で夜間稽古の指導をすることになる．その後，秋には早稲田大学空手部の監督，正課体育講師（～1955（昭和30）年）に就任，1955（昭和30）年には学習院大学空手部師範，1957（昭和32）年には，その年に亡くなった師匠船越義珍に代わって新しく開設された東急空手道場の師範に，また10月，中央大学空手部の師範へも就任する．1958（昭和33）年には東邦大学空手部の師範，その他，東京都庁，富士通，日本ビクターなどの実業団や国内外に開設された稽古場へ指導者として招聘された．海外では，アメリカ，フランス，スイス，イタリア，イギリス，ポルトガル，台湾，スペインなどへ渡航し，指導をおこなっている．1975（昭和50）年には，松濤館の再建を果たし（太平洋戦争で焼失し，船越義珍の位牌に再建を誓っていた），第２代松濤館館長に就任した．体調を崩していた1980（昭和55）年10月，全国から集まる門人たちのために，無理を押して全国指導者研修会に出席していたところ，滞在先の旅館で倒れ，救急搬送される事態となり，そのまま意識を回復することなく，1981（昭和56）年１月８日に永眠した．自らの命を「空手道を通じた人間教育」に捧げる姿勢を最期の瞬間まで貫き通し，その生涯を閉じている．

江上は，1939（昭和14）年，大日本空手道松濤館発行『空手道の真髄』（釘宮幸雄，植村和堂編）においては，型の演武とともに多数の模範演武写真のモデルとなっている．1941（昭和16）年発行の『増補空手道教範』（富名腰義珍著，廣文堂書店）の付録『大日本空手道天之形』では表紙写真としても採用された．また，1963（昭和38）年，船越義珍の七回忌に際して日月社によって再刊された『空手道教範』（富名腰義珍の原著に，第三編として基本を追加，第三編 型を第四編 型に改め第四章 基本型に大極初段を追加，同じく第四編を第五編に改め 第二章に天之型を含めた他，第五編については内容を一新している）では，船越義珍の演武写真に替え，主要な写真の演武を担当している．

自身の著書としては，1970（昭和45）年に『空手道 専門家に贈る』（楽天会，演武：青木

宏之），1976（昭和 51）年 に『The Way of KARATE Beyond Technique』（KODANSHA INTERNATIONAL LTD，演武：宮本知次），また，その日本語版として1977（昭和52）年に『空手道入門』（講談社，演武：宮本知次）を刊行し，一般に刊行された書籍としては実質２冊を世に残した形となる．この他，出版準備中に他界したため出版には至っていないが，続編の「型」についての書籍原稿（2018年７月日貿出版社より『空手道型教本』として出版予定）と，さらに組手についての書籍前文の原稿が存在する．「型」に関しては，一般に刊行されたものではないが，自らの監修の下，当時，弟子として空手の専門家にすべく育てていた「宮本君に思いを託し」（フィルム上の江上の言葉），その型の演武を収めた『松濤館制定型』を８mmフィルムとして作成，関係者に配布したものが現存している．

2-2. 江上茂に起こった転機

前述の略歴（2-1）に見られるように，1931（昭和6）年に早稲田の高等学院を舞台に空手を始めてから1981（昭和56）年に生涯を閉じるまでの半世紀，江上は一貫して空手と密接に関係していたことがわかる．その中で，転機となるのは，略歴上から読み取ると1953（昭和28）年と考えられる．結果的に見ると，この時期からいわゆる専門家として空手の指導者への道を歩みだしているからである．しかしながら，この時期は，単にそうした道を歩みだしたということだけではなく，２つの大きな出来事によって空手道についての思想がより深化していった時期でもあったように考えられる．その２つの出来事とは，１つは井上方軒（本名：井上要一郎，1902（明治35）年-1994（平成6）年）[注2) 13)]との出会いであり，もう１つは２度の開腹手術である．

江上は自らの筆で井上方軒と出会った契機について以下のように記している[14, 15)]．

「(略) …昭和二十八年か九年，ふとした機会に稽古仲間の奥山君に会いました．意表をつくものでした．形はさほど違っているとは思えませんでしたが，その根本的な発想が違うんです．これは凄い．これならきく，と目を見はる思いでした．既成の概念を全く捨てた姿だったからです．」（文献14）

「(略) …初めからやり直そうと決心したのもその頃です．もう一回奥山君に会って，ゆっくり話をきき教えてもらおうと思っていた時，彼は親和体道の井上先生を紹介してくれたのです．親和体道の技を盗んで，空手に利用しようなどとケチな了見を起こしてはいけないと，有難い教えをいただいたのもその頃です．良い稽古だと思ったら，大いに研究しなさい．そんなお言葉をいただいて，ただもうヒタムキに稽古に励ましていただきました．入門をお許しいただいたのは，一年半位もたった頃でしょうか．研究生つまり稽古人と門人との違いが，本当にわかったのもズッと後のことでした．客観的に批判的に研究することと，心身共におまかせして没入して稽古することの根本的な違いがあるので

ある．稽古を重ねていくうちに，自然に身についてくるもの，その身についた何物からか自然ににじみ出て来るということでしょうか．肉体的な技ばかりでなく，心の変化があるのです．…（略）」（文献15）

※本連載は，江上自身の著書として1977（昭和52）年に『空手道入門』として上梓されるが，この記載は編集されている．

上記の記述から，まさに空手の指導を専門に始めようという時，早稲田大学空手部の後輩である奥山氏の突きを見ることで既成概念を覆され，また，その根底にある井上方軒と出会うことによって様々な変化があったことがわかる．

一方，開腹手術については『空手道入門』に以下のような記述がある[16]．

「（略）…胃の摘出手術をすることになり，１年おいてさらにまた開腹手術というわけです．自信を持っていた体力，腕力も，がたがたに崩れ，稽古ももちろんですが，生活そのものも根底からゆさぶられることになったわけです．最も暗澹たる状況に沈んだのです．そんな時，ふっと思い出したのが「老若男女誰にでも出来る稽古でなければならない」という老師のお言葉でした．本当にこんな体で出来るかどうか，試してみようと決心しました．方法いかんでは出来るという自信もつきました．そんなことがあって初めて，稽古に一生をかけてみようという決心も，覚悟も出来たのです．しかも誇りを持って．」

１度目の手術は1956（昭和31）年，２度目の手術は1958（昭和33）年に実施された．略歴を辿れば，この時期は様々な稽古場の指導を引き受けた時期であり，その直後に見舞われたこの２度の開腹手術によって，指導者となりながらも当人は身体的な活動を著しく制限される境遇になったわけである．しかしながら，それは自身が若さを元に類稀なる鍛錬で築き上げた肉体を土台にした考え方や技術から脱却し，もう一度，師匠である船越の言葉を素直に受け止め，誰にでもできる稽古の考え方や技術を一から見直す大きな契機となった．

江上は，空手の専門家として生きていくことを決意する前後，このような２つの出来事を契機に，空手の精神性についてより完成度を高め（後述：3-1），また，それに合致した技術とその在り方，伝承方法を生涯かけて考究する道へと進んでいったのだと考えられる（3-2）．

3. 江上茂の空手道思想

3-1. 空手の精神性

3-1-1. 井上方軒から江上茂に継承された「平法」

江上 茂の２つの著作には日本空手道の目指す方向性として「平法（へいほう）」という言葉が多用される．1977（昭和52）年に録音された会話の記録に平法について語る会話があり，その中で「(略)…普遍的に，どんな人が来ても無為無策，ただ自然に立っておれば，赤子（せきし）の心で立っておれば，攻撃することもないし，受けることもないと．これは井上先生という，私の先生の言葉だけれど，『挑まれたら負けと．挑まれて受けたら，なお負け』，と云われた言葉があるんだよな．そうすると，通ずるんだよな（著者注：夕雲流，無住心剣についての話）．この先生は私に，たいら平法のあることを教えてくださったから」と，その出自を語っている[17]．つまり，この多用されている「平法」という言葉は，前章で取り上げた井上方軒によりもたらされた概念であることがわかる．

井上のインタビュー記事によれば，井上は「僕のおじいさん（伊助）は偉くてね，平法学の先生でしてね，植芝なんかにも教えたんだけど．昔から平法学というのは俺のところにずっと伝わっていた．…（中略）…憲兵指令部に一番最初に教えに行ったのは僕です．その時に，五・一五事件の時の憲兵司令官だった畑 真治（著者注：秦 真次の誤記と推定），がね，ちゃんと僕の家の先祖を調べているんだ．僕みたいな小僧っ子に，「井上先生，お宅のおじいさんという人は御所で平法学を教えておられたのですね」．これにはわしはびっくりしたな…….」と話している[18]．

井上の言に従えば，「平法」「平法学」は井上家に代々伝わり，井上方軒自身は祖父井上伊助から伝えられたものだという．そしてこれを江上は井上から学んだことになる．「平法」がなんであるかを井上が詳細に説明した文献は見当たらないが，同じインタビュー記事の中で「平法学というものは，攻撃精神でもなければ，防御精神でもないんですね．叔父貴（著者注：植芝盛平）が話す時によく入身の実体だって言ってたが，では入身とはなんぞや．入身とは和合の実在なんですよ．和合しなければひとつのものを生成化育できないでしょ．けんかしとったら生まれることはないのです．…（中略）…だからこの平法学の実在からいくとね，防御精神も攻撃精神もないと思う．日本人というのはそんなちっぽけなものではなさそうに思う．そう言うと，（叔父は）「そうだなあ」と言ってね．だからどうしてもここに合気というものが生まれてこなければいけない．この平法学に具現する実体は，出口王仁三郎先生に教わって初めてで

きたんです.」と説明している.

この「入身」について，受け取り手である江上は，その著書『空手道入門』において，次のように記載している[19].

「思いやり，心遣いとしごく当たり前に語られますが，これは大変な言葉です．相手の立場に立って考え，相手の立場を知って行動する．たいせつなことです．武道的に表現すれば入身でしょう．真実全く相手になりきった時，勝ちも敗けもなくなる一体の境地が得られましょう．相手と共に生きる．それが極意ではないでしょうか．人はすべての同根同気であることを本当に知る．体得する．そこまで稽古すべきです.」

2つの記事を結び付けて考えると，ここで「平法」として述べられていることは，「自他一体」の境地と考えられる．それが「入身」あるいは「和合」という言葉で表現され，相手と一体となった時，勝ちも敗けもなくなり，すなわち，防御精神も攻撃精神もない，あるいは必要のない境地へと達するということを意味している.

このような状態について，江上は前述の会話記録の中で「挑まれたら負け．挑まれて受けたら，なお負け」という世界をどう実現するのかを問われ，「…（略）で，井上先生の場合だったら，俺はこの目で見せて頂いているからね．『ただ歩けばいいんだよ』と．すーっと歩いて行かれると，打ち込んで行った奴が，勝手に吹っ飛ぶと．それだけの事．植芝先生もそうだったけどね．そういう姿が，どっから，何故，出てくるのかと．…（略）」と語っている[20].

したがって，江上茂がその著書で中核においた「平法」という概念は井上方軒からもたらされたものであり，それは単に概念や観念としてだけではなく，武道的な在り方として具体的に井上が具現・体現する姿を通して継承されたものであることがわかる.

3-1-2.「平法」および「平法学」とは

「平法」について記載された書籍は数冊散見される．前節で取り上げた江上の会話記録において会話の発端となった鷹尾敏文による「平常無敵流平法」（『武道の神髄』，佐藤通次・鷹尾敏文共著，日本教文社，1977）の他，『歴史に学ぶ心学の武道 平法学小太刀』（鐵屋 昭著，展転社，1994），『源流剣法平法史考』（森田 栄，NGS，1996），『平法―兵法とは平法也―』（加藤花刀斎著，岩崎電子出版，2004）などがある．書籍タイトルに含まれる平常無敵流平法，平法学小太刀，そして，書籍内で取り上げられている中条流平法，富田流平法，二階堂平法，雖井蛙流平法など，「平法」という言葉は幾つかの剣術にその流名として登場する.

そもそも「平法」の起源は，「平法学として中国古代の歴代帝王の学ぶ所の剣法にして，第十五応神天皇の御代，百濟国の博士王仁によって我が国に渡来したものだ」とされる[21]．その根拠として，森田は信州大野当寛著『止戈正要』(1810) の記述を挙げており，上記に列挙した書籍はいずれも平法の系譜について同様の見解を示している．

では，「平法」とはいかなるものであるのか，本論は「平法」の内容を精査することが目的ではないため，以下に，加藤花刀斎による「平法」に関するまとめを引用し，検討の材料とする[22]．

「これまで見てきたように，多くの兵法家が敵に勝つ為の厳しい修練の果てに得たものは，和の世界，敵のない境地でした．それこそが平法だったのでしょう．孫子でいう「戦わずして勝つ」に極めて近いかもしれません．

…（中略）…

孫子にある「戦わずして勝つ主義」は，「あれこれと策をめぐらせて勝つ主義」と誤解されやすいのですが，「戦わずして勝つ」ためには，戦ったら勝つだけの実力を持ち，いつでもその実力を発揮できる準備を怠ってはいけないのです．

つまり，口だけではなく行動，実力が伴っていなければ相手に勝つこともできない，計画も成功しないということです．しかしながら，相手に勝つ為の努力を続けることも，きっと限界があり，最善の道とはいえません．最善の道は，争いを起こさないことなのです．『剣と禅』のなかに次のようにあります．

「百たび鞘を発し百たび利を得るとも刀剣の本意」とはいえないが，さりとて百たび鞘を発して敗れたのでは，なおさら剣の本意ではあるまい．「百たび鞘を発し，百たび利を得る」実力をもったものが，未だ鞘を発せずして対者を制圧するところに，剣の妙味がある．これを「鞘の中」という．それが“霊明”に基づかず，“功利心”から行われるところに“冷戦”がある．

が，「鞘の中」も，相手がその威力に怯えおののいているのでは，まだ剣の至境ではあるまい．その人と相対すると，太陽に照らされた淡雪のように敵対意識がおのずと消え去ってしまい，さらに自分で進んで悦服し，その人に接することにより生の歓喜を感ずるようなのが本当の「鞘の中」の徳というものでなければならない．

まさに，これこそが『戦わずして勝つ』の本意だといえましょう．」

加藤の解釈によれば，「平法」は「戦わずして勝つ」という孫子の言葉に近いとされる．加藤は同著の中で「平法」を流名に組み入れた流派を含む，多数の剣術の極意を検討した上でこの解釈に至った．それに従えば，「戦えば勝てる」実力を錬磨しながら，なお「戦わずして勝つ」ことを最上とする思想が共通に存在したことがわかる．さらに上記の記述からは，「戦わずして勝つ」ことの中に，①相手の気を制して戦いを起こさない，それを越え，②相手を包含して敵対心すら消えてしまうような境地，さらには，③接することで幸せになるような存在として実在する境地，の３つの段階を読み取ることができる．

一方，「平常無敵流平法」に取り上げられる「無敵」という概念も「平法」と同様に捉えられている．鷹尾はこの「無敵」の状態について「「争い」は，敵を意識することから起こるのであり，その敵は，己に対する敵であって，自我の主張がなければ，つまり無我であれば敵のあろう筈はない．「天地一息，万物同根」，天地万物すべて一息から分化生成したものであることを知れば，我，人共にまた同根であることを観じなければならない．人皆がこのことを認識してはじめてそこに真の平和がある，といえよう．」と解釈し，「平常」「無敵」「平法」ともに「平和」の中に存在すると説明した[23]．つまり，真に自他一体となった時，敵対するものはなく，争いは起こらない，「平法」とはそのような世界と考えられる．

ここでは「平法」あるいはそれに通ずる「無敵」という状態について，加藤，鷹尾の解釈を見てきたが，これは江上の記述や井上の発言に見られる「挑まれたら負け．挑まれて受けたら，なお負け」「攻撃精神でもなければ，防御精神でもない」「入身」「和合」といった表現と同質のものであると解釈できる．

一方，「平法学」という場合の解釈については，流名に「平法学」を標榜する平法学小太刀について書かれた鐵屋の記述を検討の材料とする[24]．

「…（中略）…

このような古い伝承をもつ平法学は，心学といって，心の自由な働きを臨機応変に生かす兵法を目指していたから，漢民族の老練な処世の仕方を述べている『老子』の本や漢代の歴史家司馬遷によって記録された『史記』などの歴史書や，戦略戦術の代表的な兵法書『六韜・三略』などの本は，特に必読の書になっていて，よく読まれてきたものであった．

これらの本には，絶え間なく治乱興亡の歴史を繰り返したなかで，したたかに生きてきた漢民族の経験や知恵そのものが書かれているのであって，これらの本を読むことによって，時代を動かしてきた人間の様々な心を学ぶことができる．

これが非常に参考になるのである．即ち，人間学である．

政治，経済，軍事，教育，天文，卜占に至るまで，あらゆる人間の営みに関するものは，全て人間の心の働きから生まれてきたものであり，王仁が『心学』即ち人間心理の深い洞察を平法学の中心に据えたのは非常にすぐれた見識であったと言うべきであろう．

そうでなければ，戦に勝つ兵法にならなかったし，戦わずして勝つ兵法の極意即ち平法にまで達することができないものであった．

それには，しっかり学問をして先人の知恵に学ばなくてはならない．学問と修養を積むことによって，人間は何をなすべきかが見えてくる．

かかる平法学はわが国へそれが伝えられて以来，指導者がこれを学べば，国を治める道となり，武芸に携わるものがこれを学べば，不敗の剣法となり，庶民がこれを学べば，処世の道になる，という心性の武道へと発展をしてきた．」